ラフカディオ・ハーンと医薬―癒しと救い　④

恨みを残して死ぬこと―その1

中島淑恵*

1. はじめに

ラフカディオ・ハーンが渡米したのは1869年，19歳の時であり，わずかばかりの小銭をポケットにただ一人，まだ自由の女神もなかった[1]ニューヨークに移民船で降り立ったのであった。渡米直前のハーンがどこで何をしていたのか，実はよくわかっていない。のちに弟子に語ったところによれば，ロンドンで思い出したくもないような最低の放浪生活を送っていたと本人は述懐している。しかし，アメリカに降り立ったときのハーンはまるで神学生のような風体をしていたともいわれていて，もしかしたら一般にいわれているように英国リヴァプールから移民船に乗ったのではなく，この船がその後寄港したフランスのル・アーヴルから乗り込んだのではないかと推測する向きもある。そして，ル・アーヴルにほど近いイヴトーという町に，かつてハーンが在籍したといわれている神学校があったのは確かなことである。

ハーンがフランス語をよくしたことは一般にはあまり知られていないかもしれないが，ヘルン文庫の洋書の蔵書のうちおよそ三分の一にあたる700冊余りはフランス語の本であり，母語の英語と並んで，フランス語もかなり自由に読み書きできたように思われる。また，マルティニーク滞在時代にも現地のクレオールの民話や歌を取材したメモを残しているが，これはおそらくフランス語の通訳を介して取材を行ったものと思われ，フランス語に関しては，聞いたり話したりもかなり自由にできたものと思われる。したがって，ハーンが19歳でアメリカに渡るより以前にフランス語をすでに習得していたことについては否定の余地はないが，それをどこでどのように身につけたかについてはまだよくわかっていないことが多い。ハーンが在籍していたといわれている，しかも同年の生まれであるモーパッサンともしかしたら同時期に在籍したかもしれないといわれているイヴトーの神学校は，第二次世界大戦を終結に導いた1944年6月6日のノルマンディー上陸作戦の激戦地にあり，空襲によって学籍簿が焼失しているため，今日ハーンがかの地にいた証拠はないものとされている。もっとも，ハーンが受けたような当時の欧州の中等教育におけるフランス語教育は相当に程度の高いもので，ハーンも学校教育によってかなりフランス語の素養が磨かれたものであろうということは想像にかたくない。したがって学術的には，ハーンはフランスにいなかったものとされているが，この点についても，今後の研究が進展すれば，新資料の発見などにより，ハーンのフランス滞在が証明されるかもしれず，今はハーンの滞仏体験については想像の域を出られないことだけを申し述べておく。一つでも資料があれば存在証明となるが，「いなかったこと」を証明する「不在証明（アリバイ）」はいつの場合も実に困難なものなのである。

ともあれ，結局親戚に頼ることもできず，期待していた母国からの送金もなく，新天地アメリカで裸一貫で生計を立てなければならなかった19歳のハーンは，印刷所の見習いなどを経てやがてジャーナリストとして身を立てることになる。ハーンの生涯を考えるとき，19歳から39歳までの20年間を過ごしたアメリカ時代を簡単に軽視すべきではないだろう。のちに訪れる日本での生活がハーンの名を不朽にしたとはいっても，その基礎を築く読書体験や文筆修行はやはりアメリカでなされたのであり，アメリカ時代がなければ，その後の「怪談」の作家・ハーンはなかったといっても過言ではないからである。ハーンの生涯と作品を関連づけて語るとき，よく引き合いに出されるのが，幼児期を過ごした母の国ギリシアと少年期を過ごした父の国アイルランド（当時はまだ英国領であった）の記憶であるが，そのような幼少期の記憶もさることながら，筆一本で身を立てようと思い立ち，文筆修行に励んだ青年時代の知的蓄積の意味もまた，大きいといえるのではないだろうか。フランス語にしても，学校で習った文法や子供向けの読本よりも，アメリカ時代の青年期に耽読した小説のほうが，ハーンの物語世界の形成に深い影響を及ぼしたであろうことは想像にかたくないのである。

2019年はハーン渡米150周年の記念すべき年であり，これを祝って米国のハーンゆかりの地であるニューヨーク，シンシナティおよびニューオリンズで，ハーン渡米を記念する「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン」の諸行事が行われた。「オープン・マイン

* Toshie NAKAJIMA
富山大学人文学部
〒930-8555 富山市五福3190
E-mail : toshie@hmt.u-toyama.ac.jp

図1　アメリカでの公演（写真提供：小泉八雲記念館）

図2　ハーンの初版本を数多く取り扱っていたニューヨークの古書店

ド・オブ・ラフカディオ・ハーン（The Open Mind of Lafcadio Hearn）」は，ハーンの「開かれたマインド」を顕彰し，次代に伝えるため，小泉家（その中心になっているのは，ハーンの曾孫であり松江の小泉八雲記念館の館長でもある小泉　凡とセツ夫人の再来かと思われるような敏腕プロデューサーぶりを見せる祥子夫人である）と各地のハーン関係者が協力し合って開催してきたイベントの総称で，海外での開催は2014年のギリシア，2015年のアイルランドに次いでアメリカが3回目となる。今回も小泉　凡の講演のほか，松江出身の俳優・佐野史郎の鬼気迫るハーン作品の朗読と同じく松江出身のギタリスト・山本恭司による超絶技巧のギター・パフォーマンスが響き合う得難い劇空間が醸し出され，

図3　ニューヨークの古書店で入手したハーンの初版本など

ハーンの「怪談」の凄みと普遍性を再確認する絶好の機会となった。タイトルは「怪談―恐怖の底より聴こえる救いの呼び声（Kwaidan―Call of Salvation Heard from the Depth of Fear）」である。筆者は縁あって今回，ニューヨークとシンシナティでの公演を鑑賞させていただいた。今回はその公演の演目でもあった「おしどり」「策略」「因果話」の三作をめぐって[2]，恨みを残して死ぬことの意味を考えてみようという趣向である。

2.「お し ど り」

「おしどり（Oshidori）」は，『怪談』では冒頭の「耳なし芳一」の次に配された小さな物語である。例によってタイトルは日本語を音写したままで，日本語を解さない読者には意味がわからないようになっている。本文では，猟師ソンジョウ（Sonjô）が自分が渡ろうとしていた川で仲良く泳いでいる「一対のオシドリ（a pair of oshidori）」を見つける冒頭の場面で，オシドリに「マンダリン・ダック（mandarin-ducks）」と直訳が加えられたうえに，この語に注がついていて，「古来極東では，これらの鳥は夫婦の愛情の象徴とみなされている（From ancient time, in the Far East, these birds have been regarded as emblems of conjugal affection）」と説明されている（vol. 11, p. 176）[3]。この注釈によって，西洋の読者にもこの鳥の含意するところが明確になり，翻ってすぐ上のタイトルの意味するところも了解されるという仕組みになっている。

この物語は典拠がはっきりしていて，『古今著聞集』巻二十にあり，類話が『沙石集』巻七にあるが，ヘルン文庫にはいずれも収蔵がある[4]。ハーンは多くの物語を，原話からアレンジを加えて英語に直し，自らの物語として編み直したとして，ハーンの物語は「再話」と形容されることが多い。また，ハーンは日本語原文を読めなかったので，セツ夫人が読んで聞かせたという逸話もよく知られているところである。しかも，気に入った物語は何度も読み聞かせたし，セツ夫人にしても初見ではなく，自分の言葉として語って聞かせてほしい，というハーンの希望に従って，物語を自分の力で咀嚼し，十分に理解したうえで語って聞かせた，というところはセツ夫人自身が『思い出の記』のなかで語っているところで

はある。

物語では，ソンジョウは「たまたまひどく腹がすいていた（happened to be very hungry）」ので，「おしどりを殺すのはよくない（To kill oshidori is not good）」と知りながらたまたま目についたつがいのおしどりに矢を放つ。矢はオスに当たり，メスは向こう岸の草の影に隠れて姿が見えなくなる。ソンジョウは「死んだ鳥を持ち帰ってそれを調理する（took the dead bird home, and cooked it）」が，その夜の夢枕に美しい女（a beautiful woman）が現われ，女はソンジョウに向かって以下のように訴える。ちょっと長くなるが，重要なセリフであると思われるので，全文を引用しておく[5]。「どうして，おお，どうしてあなたはあの人を殺したのですか。あの人がどんな罪を犯したというのでしょう。赤沼で私たちは一緒であんなに幸せでした。なのにあなたはあの人を殺した。あの人があなたにどんな害を及ぼしたというのでしょう。あなたは自分のしたことが分かっているのかしら。おお，あなたのしたことはどんなに残酷な，どれほど酷いことであったか。私をもあなたは殺したのです。なぜなら夫なしには私は生きられないから。これを言うために私は来たのです（Why --- oh! why did you kill him? --- of what wrong was he guilty? --- At Akanuma we were so happy together --- and you killed him! --- What harm did he ever do you? Do you even know what you have done? --- oh! do you know what a cruel, what a wicked thing you have done? --- Me too you have killed --- for I will not live without my husband! --- Only to tell you this I came）」。こう述べた後で女は「聴く者の骨髄に刺さるような（pierced into the marrow of the listener's bones）」声ですすり泣き，「日暮るればさそひしものを赤沼の真菰がくれのひとり寝ぞ憂き」という歌を詠む。この歌を詠んだのち女はさらに言葉を続けて，「あなたは自分のしたことを，知らない，知るべくもないのです。けれど明日赤沼に行けば，お分かりに，お分かりになるでしょう（you do not know --- you cannot know what you have done! But tomorrow, when you go to Akanuma, you will see --- you will see ---）」（vol. XI, pp. 176–177）と述べて姿を消す。ソンジョウはこれを不思議に思って夜が明けて赤沼に行ってみると，そこに雌のオシドリが泳いでいて，ソンジョウに気づくと，「奇妙にも目をじっと見据えたままで（looking at him the while in a strange fixed way）真直ぐに向かってくる。そしてその嘴で，自らの体を引き裂き，猟師の目の前で死んで果てる（with her beak, she suddenly tore open her own body, and died before the hunter's eyes ---）」（vol. XI, p. 178）のである。

ここで原拠の『古今著聞集』と対照させて異同を確認しておくと，まず，原拠では猟師[6]は「おしどりを殺すことはよくない」ということも認識しておらず（少なくともそのような記述はない），また，「腹がすいていた」

図4　『古今著聞集』巻二十「おしどり」の「あかぬま」の歌の箇所

という正当化もなされていない。また，獲物を「料理した」という記述もない。すなわち猟師の行為は，「えがらをバえぶくろに入れて家にかへりぬ」とあるだけなのであって，その鳥を食べたとはいっていないのである[7]。そして，その次の夜に「いとなまめきたる女のちいさやかなる」[8]が枕元に現われてさめざめと泣くという展開になっている。その様子を見て「何人のかくハなくぞ」と問いかけると，女の答えは，「きのふあかぬまにてさせるあやまりも侍らぬにとしごとのおとこをころし給へるかなしびにたへずして参りてうれへ申也此思ひによりてわが身もながらへ侍まじき也」というものである。ハーンの英文にあるような，語り掛けるような，責めるような調子，すなわち直接話法のディスクールは，間接話法におかれた原拠ではなりを潜めている。このあと件の歌を詠んで女は姿を消す。目覚めた猟師がえがらを開けてみるとそこには「をしの妻とりのはらをおのがはしにてつきつらぬきて死にて」あるのを見つける，という結末になる。

ハーンの物語において，女がさめざめと泣きながら猟師を責め立てるくだりと，最後に再び訪れた赤沼で雌鳥が猟師めがけて突き進んできて，その目の前で嘴で自らの体を引き裂くという対決の場面が，原話に新たに付け加えられたハーンの創作の箇所であるといえる。平川祐弘はこの点について，フロベールの『聖ジュリアン』が影を落としている，と指摘している[9]が，両者を比較してみると，根本的な違いがあるようにも思われるのである。まず，両者において猟師が殺生を厭わないのは共通のことではあるが，ハーンの「おしどり」の猟師が「おしどりを殺すことはよくない」とわかっているうえに「腹がすいていた」ので殺したのに対して，フロベールの『聖ジュリアン伝』[10]のジュリアンは，幼いとき何げなく鼠を殺してから，殺生にむしろ快感を覚えるようになり，意味もなく殺生を重ねるという展開を見せる（これは，一般にアンドレ・ジッドが嚆矢とされる「無動機の殺人」の元祖ともいえよう）ので，殺生についてのスタンスが根本的に異なっているといえるのではないだろ

うか。ジュリアンが殺生をやめる転機となるのは，鹿の家族に出会い，まだ乳飲み子の子鹿をまず射止め，次に「天を見ながら，深く引き裂くような，人間の声を上げる（en regardant le ciel, brama d'une voix profonde, déchirante, humaine）」その母鹿を殺し，その最後の矢を額に受けたままそれをものともせずジュリアンのほうに迫って来る牡鹿に呪いの言葉を掛けられたときである。牡鹿は，「燃え盛るような，総主教のように，裁判官のように威厳のある目つきで（les yeux flamboyants, solennel comme un patriarche et comme un justicier）」ジュリアンを見据えると，遠くで（おそらく教会の）鐘が鳴っている間に，「呪われよ，呪われよ，呪われよ。いつの日か，獰猛なる心よ，お前は自らの父と母を殺すであろう（Maudit ! maudit ! maudit ! Un jour, coeur féroce, tu assassineras ton père et ta mère !）」[11] と人間の言葉でジュリアンに呪いを吐いて命尽きるのである。

これと比べてみると，確かに翌朝赤沼にソンジョウが出掛けて，そこで雌鳥と対峙し，ソンジョウの目の前で雌鳥が自殺するという結末は，ハーンが意図的に原話を改変したものであることがわかる。しかし，そこで強調されるのは，動物が人間の言葉を話すことでも，動物が呪いをかけることでもなく，夫婦の深い絆と，妻が深く夫を思う心なのではないだろうか。その点において，雌鳥の悲しみは，妻子を奪われた家長としての牡鹿の悲しみとはまた性質が異なるように思われるし，ジュリアンはやはり牡鹿の額を射てしまうが，ソンジョウは雌鳥を殺めようとはしない点も大きな違いであるように思われる。オシドリも動物であれば子どもがいても不思議はないのであり，殺生の残酷さを物語るには親子を殺すほうがインパクトが大きいようにも思われるが，ハーンはそのような筋立ては選ばなかった。むしろ日本の原話をさらに深めて，夫婦の契りの強さと雌の貞操を深く浮き彫りにする結末を配したのだといえるのである。この物語で，雄はあっけなく殺され，とくに呪いに出るということもなく，むしろ雌のほうがその怨みを晴らそうと猟師のもとに現われるという展開のほうが，他のハーンの怨恨の物語と比較しても，意味のあるものであるように思われるのである[12]。

3. 「策　　略」

「策略（Diplomacy）」は，『怪談（Kwaidan）』（1904年）に収められた小話であり，屋敷の庭（the garden of the yashiki）で死罪となる男が，馬鹿（stupide）に生まれついたのは自分のカルマ（karma）のせいで，馬鹿だからと言ってその者を殺すのは間違っている，間違っていることは必ずや報いを受ける，と（いまや男を殺そうとしている）主人に述べたあと，「お前さまがあっしを殺すときっとあっしは報復しやすぜ。お前さまが惹き起こす怨みから復讐が生まれる，そして悪は悪によって報いを受けるのだ（So surely as you kill me, so surely shall I be avenged; --- out of the resentment that you provoke will come the vengeance; and evil will be rendered for evil）（vol. XI, p. 187）」（vol. XI, p. 188）と毒づくのを，主人が一計を案じ，罪人の怨念を石にかじりつくことに転化させることで，死後に怨念が残らないように図り，これに成功するというものである。この物語のなかで書き手は，「人は誰も強い怨みを感じながら殺されると，その人間の幽霊が殺したものに対して報復することがある（If any person be killed while feeling strong resentment the ghost of that person will be able to take vengeance upon the killer）」（vol. XI, p. 188）のであり，罪人に対して主人は，首をはねられたらすぐに近くの敷石にかじりつくように提案したあと，「お前の怒った幽霊がそれをし得るならば，我々のうちには恐れおののく者もおるやも知れぬ（If your angry ghost can help you to do that, some of us may be frightened ---）」（vol. XI, p. 188）と述べ，罪人はそのとおりにする。周囲のものは亡霊が復讐に現われはしないかと恐れたまま数カ月を過ごすが，結局何も起こらない。主人の侍が言うには，「自分は男の心を復讐心からそむけた（I diverted his mind from the desire of revenge）」のであり，罪人は「敷石を噛むという明確な目的を持って死んだ（He died with the set purpose of biting the stepping stone）」ので，「他のことはすべて忘れたに違いない（all the rest he must have forgotten）」（vol. XI, pp. 189–190）のだという。

この物語は結局，主人の「策略（diplomacy；策略というより「駆け引き」といったほうがよいかもしれない）」によって，死に至った罪人の怨念が敷石にかじりつくという目標を与えられ，結局その行為の成就によって死後に怨念は残らない，という結末となる。これは，屋敷の家来や家人たちが数カ月も怯え続け，供養の施餓鬼を行っては…と恐る恐る主人に進言するように，常人たる読者にとっては後味の悪い結末といえるのではないだろうか。この物語の原拠は，須田千里が指摘しているように，ヘルン文庫にも所蔵のある『世事百談』巻三の「欺て冤魂を散」で間違いなかろうと思われる[13]が，同書とハーンの大きな違いは，『世事百談』では主人が家僕を手打ちにする話となっているのに対して，ハーンのほうではやはり罪人と手打ちにする主人の関係がよくわからないことになっている点である。ちなみにこのような主従の関係や，何かあれば主人が家僕に私刑を加えるようなあり方は，ハーンがアメリカ時代の後半を過ごしたニューオリンズに代表される南部ではおそらく当たり前にあったのではないかと思われるが，南北戦争直後の奴隷解放の風潮に配慮したためか，伝統的な主従関係をなぞるような記述を避けようとしたのかもしれない。とはいえそのほかにも，よく読み直してみるといくつか奇妙な点があることに気づかされる。

まずこの罪人がどのような罪咎で処刑されようとして

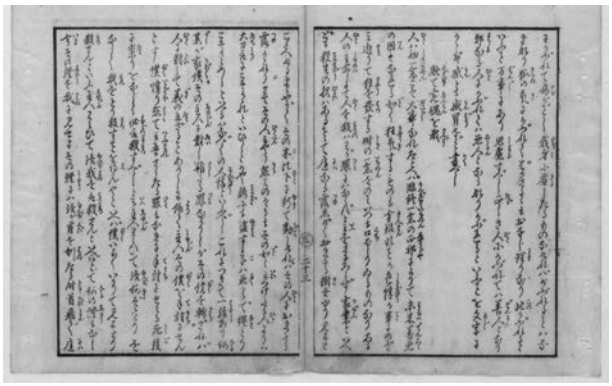

図5　『世事百談』巻三「策略」の原話と思われる逸話

いるのか，ハーンの物語にはまったく言及がないという点である。死に値するような罪を犯したのかがはっきりしないため，この男がなぜ殺されなければならないのか読者には納得がいかず，この罪人の納得のいかない様子に共鳴できるような仕組みになっているのである。場所と時代も実ははっきりしない。「屋敷」「侍」といった単語がそのまま日本語の音写で出てくるので，日本の物語であろうということはわかるし，その内容から日本の昔，おそらくは江戸時代という時代設定であろうことは何となく推測される。男が暴れないように男の周囲に小石を詰めた米俵を置くあたりの描写など，かなり詳細に処刑の様子を描いていて，しっかりと考証している様子がうかがえるのにも関わらず，どうやら処刑の行われる庭は奉行所のお白洲ではなく，屋敷（すなわち私邸）の庭であり，首を切るのは首切り役人ではなく，屋敷の主人その人であるのも異例といえば異例である。すなわちこの罪人は，法を犯したのかはっきりしない以上ある意味罪人ですらないといえるのかもしれず，いわば私刑によって首を切られることになったようにも思われる。それゆえ，殺される前に罪人の言った「あっしがこうして死罪になる過ちは，やりたくてやったことじゃねえんです。過ちのもとになったのは，あっしのとんでもない馬鹿さ加減のためでやして（the fault for which I have been doomed I did not wittingly commit. It was only my very great stupidity which caused the fault）」（vol. XI, p. 187）」という申し開きも，またさらに重い意味を持ってくるように思われる。現代人ならば，このくだりで，永山則夫の『無知の涙』を思い起こす読者も多いであろう。事実アメリカでの佐野史郎のパフォーマンスは，それを彷彿とさせる悪党ぶりの演技だったのである。

ところでわが国では，明治時代に入ってからもしばらくは斬首刑が行われていたのであり，最後に斬首刑となったのは，1879年（明治12年）の高橋お伝であったといわれている。『怪談』の発表は1904年でこれよりかなり後のことになるが，お伝の処刑の模様やその背景も，あるいはこの物語の生成に影を落としているのかもしれない。とはいえ，「策略」が『怪談』には珍しく男同志の駆け引きの物語であり，結局男の怨念は死に接して，敷石を噛むことで昇華されてしまって死後に怨念は残らないという展開になる。このような男女の怨念の違いは，ハーンの物語世界においては重要なものであるように思われ，恨みあるいは未練を残して死んで祟るのは，ハーンにおいては圧倒的に女性が多いのである。

この2つの話を受けて，アメリカでのパフォーマンスでもクライマックスとなったのは，妻の怨念が死後も祟り続ける「因果話」なのであるが，紙幅の関係もあり，これについては次回でじっくり述べることにしたい。

注・引用文献

1）自由の女神の除幕式が行われたのは1886年10月28日のことであり，当時ハーンは36歳でニューオリンズにあって，夏にはグランド島を再訪し，中編小説『チータ』の執筆に没頭し，フランス文学の翻訳も精力的にこなしていた．この後およそ2年間の滞在を経て1889年5月にマルティニークからニューヨークに戻ったハーンは自由の女神像を目にしていたはずであるが，1890年3月に来日のため日本を発つときにはニューヨークからバンクーバーに鉄路で向かっているため，自由の女神とはいわばすれ違いの関係であったように思われる．19世紀末，欧州からアメリカに至った多くの移民にとって，自由の女神がアメリカでの「自由な生活」の象徴であったのに対して，ハーンはいわば旧世代に属していて，ニューヨークの港に降り立った青年ハーンの眼前に広がっていたのは，一見旧大陸と地続きに見える茫漠たる都会であったであろうことを記憶にとどめておいてもよいだろう．

2）ニューヨークの公演では，冒頭に「神々の首都」から松江の夜明けの風景が読み上げられ，そのあとにこの三話，また，最後には「カルマ」から「霊」の一節が読み上げられるという体裁をとっていた．物語等の選択は，佐野史郎が構成を考えておこなったとのことである．

3）ハーンの原文は以下の文献より引用し，巻数と頁数のみを示す．なお，邦訳は拙訳である．
Lafcadio, H. The writings of Lafcadio Hearn. Boston and New York, Houghton Mifflin Company, 1922.

4）原拠が判明しているものについては，富山大学附属図書館からPDFデータを公開しているので，ご確認いただきたい．

5）原文のシンプルさもぜひここで味わってほしい．

6）原話では猟師の名は馬允である．セツがハーンに読み聞かせたとき「尊允」と読み間違えたという説が有力である．

7）よく読めばハーンの物語でも「料理した」とはいっているが，「食べた」とはいっていない．

8）ただ「美しい（beautiful）」と形容しているハーンの表現との違いにも注目してほしい．

9）小泉八雲．“論考　小泉八雲の怪談の位置”．『骨董・怪談』個人完訳　小泉八雲コレクション．平川祐弘訳．東京，河出書房新社，2014，p. 373．（ISBN 978-4-309-02299-4）

10）原著は1877年発表のフロベールの小話集『トロワ・コント（Trois contes）』に含まれる「聖ジュリアン伝（Légende de Saint Julien Hospitalier）」であり，アメリカ時代のハーンが所有していて愛読していたことは，ヘルン文庫の蔵書等からもわかる．

11）Flaubert, G. Œuvres II. Collection de la Pléiade, éditions Gallimard, 1952, p. 633.（ISBN 9782070102020）

12）『怪談』の愛読者ならば，夫婦での暮らしを楽しんでいた雌鳥の姿に，「雪女」や「お貞」の姿を認めることは容易であろう．ハーンの物語において，「妻」は「母」であることよりも若く楽しき「伴侶」であることのほうが重要な特徴であるように思われるのである．

13）須田千里．『怪談』「策略」と『骨董』「雉子のはなし」の原拠．『文学』．2009年7月号，115–125.

（原稿受付け：2020.2.14）